

新しい経済社会に向けた幸福な経営の在り方



企業にとって、社員が幸せに働ける環境づくりは、人材不足の解消や働き方改革にもつながる経営課題でもある。「幸福学」を提唱する前野隆司氏が、これからの幸福な経営のあり方について語った。

講師：前野 隆司 氏

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
教授



人類3.1は「Well-being 第一」の社会 ウェルビーイングは大転換期の合言葉

ウェルビーイングは世界保健機関(WHO)が1946年に「健康」を定義したときに使った言葉で、「身体的・精神的・社会的に良好な状態」と訳されていた。現在は医学分野では「健康」、福祉分野では「福祉」、心理学分野では「幸せ」と訳されることが多いが、日本ではここ数年「幸せ」という意味で使われることが多い。幸せな状態は健康にも良く、働きがいにもつながることが分かってきたからである。

世界の人口はこれまで、増加して定常化するサイクルを3回繰り返してきた。狩猟採集生活時代を人類1.0、1回目の定常化時代を人類1.1、農耕時代を人類2.0、2回目の定常化時代を人類2.1、産業革命後の成長期を人類3.0、現在の3回目の定常化時代を人類3.1とすると、1回目の定常化の時代には壁画などアートが盛んになり、2回目にはブッダや諸子百家、ソクラテスやプラトンが現れるなど思想・宗教が栄えた。つまり、人口増加時には経済成長が礼賛されがちだが、成長が限界を迎えると代わりにアートや思想などの知

恵が発達し、文化的な時代を迎えたといえる。

3回目の定常化が起こりつつある現在、人類3.1は幸せと文化の時代であり、「Well-being 第一」の社会に入っていくと考えられる。

日本は「失われた30年」ともいわれ、経済が定常化し、人口も減少に転じている。これは世界に先駆けて定常化時代がやって来たといえる。成長が止まるのは良くないように見えるが、過去2回の定常化を踏まえると、豊かな文化的時代になると想像される。

これからの時代はウェルビーイング産業が進展するだろう。健康産業は医療系から食、スポーツ、睡眠にも及ぶ。さらに心の幸せや心の成長に価値がシフトし、美しい心、美しい社会の時代に大きく変化するだろう。

ウェルビーイングは産業革命以来の大きな転換期の合言葉になると思う。かつての日本には、近江商人の三方良し経営のようなウェルビーイング経営が元々存在していた。リーマンショック後、日本は欧米の合理主義経営に舵を切ったが、今後日本の古き良き経営を見直しながら、新たなテクノロジーやデジタルを使ってウェルビーイングの世界をつくる時代になっていくのではないか。

幸せな社員は創造性や生産性が高く 欠勤率・離職率が低く、健康・長寿

こうした転換期においては製品・サービスを通して社会を幸せにすることも大事だが、従業員を幸せにする経営が何よりも重要となる。

幸せな社員は不幸な社員よりも創造性が3倍、生産性が1.3倍高く、不幸な状態で働けば創造性は3分の1、生産性は30%下がるという研究結果がある。幸せな社員の売り上げは37%高く、欠勤率は41%低く、離職率は59%低く、業務上の事故も70%少ない。

幸せな人は不幸な人よりも7~10年長寿で、病気にもなりにくいことが分かっている。社員が幸せに働くことで健康経営になり、そして生産性が高まるため、働き方改革にもつながる。

心の幸せには四つの因子がある。一つ目は自己実現と成長(やってみよう因子)、二つ目はつながりと感謝(ありがと因子)、三つ目は前向きと楽観(何とかなる因子)、四つ目は独立と自分らしさ(ありのままに因子)である。日本企業では今、これらが失われる傾向にある。それを取り戻すことが会社の活力アップにつながるだろう。

日本は安全な国であり長寿国であるが、世界幸福度調査では先進国中最下位の54位である。だが、楽観的に考えれば安全・健康が満たされているのだから、心の幸せに注力すれば幸福度は急激に伸びるのではないか。ぜひ、幸福な経営を実践していただきたいと思う。